



Title	八甲田山雪中行軍遭難事件の民俗誌的研究
Author(s)	丸山, 泰明
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49123
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	まる やま やす あき 丸 山 泰 明
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 1 6 7 4 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 20 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化形態論専攻
学 位 論 文 名	八甲田山雪中行軍遭難事件の民俗誌的研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 川村 邦光 (副査) 教 授 杉原 達 准教授 富山 一郎

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の序章では、先行研究を踏まえて、問題意識と方法が提示されている。青森歩兵第五聯隊の将兵、199 人の死者を出した八甲田山雪中行軍遭難事件（以下、遭難事件と略）をテーマとし、東アジアにおける日本とロシアの対立という歴史的背景を踏まえて、民俗学の立場から、公的な文献・文字資料のみならず、公的な資料からは排除される噂話や美談、怪談話、小説、映画なども歴史記述の一形態として捉え、この事件の死者がどのように慰霊・顕彰され、語られ、表現されて、事件の記憶が編成されたのかを解明し、当時の世相も記述する民俗誌として作成することが課題として設定されている。

第 1 章では、防衛省防衛研究所図書館や国立国会図書館の所蔵する資料に基づいて、この遭難事件の経過や陸軍当局の対応について記すとともに、筆者の調査も踏まえて、岩手県・宮城県の遺族や地域社会の人々の動向を検証している。遺族や地域社会の人々は陸軍当局の対応や天皇の勸旨に感謝して「殉国の勇士」として理解しながらも、遭難死の恐怖から徴兵忌避が起こっていたことが明らかにされている。

第 2 章では、遭難事件の発生後、その見世物化がすぐさま始まったことが論じられている。ジオラマや幻灯、演劇、生人形、そして映画である。映画は 1921 年に製作され、その後、1977 年に『八甲田山』が製作され公開された。新田次郎の『八甲田山死の彷徨』を原作とする。両者を比較して、小説で描かれた軍隊や明治という時代に対する批判的な視点が映画では抜け落ちて、見世物化の系譜を引いていることが指摘されている。

第 3 章では、一兵士が上官を介抱しつつ凍死したとする美談、またその光景を撮った写真やその兵士の銃を取り上げ、殉国の勇士とする美談が写真、また天皇の博物館・振天府や軍事博物館・遊就館に展示された銃によって可視化される過程が分析され、近代的な視覚的メディアを通じて近代の国家的な美談が生み出されたことを論じている。

第 4 章では、遭難事件を記念して建立されたモニュメント「歩兵第五聯隊第二大隊遭難祈念碑」が取り上げられる。この祈念碑の上に立つ銅像は生還者 11 人のうちの一人、仮死状態のまま立った姿で発見された後藤房之助伍長である。銅像は外敵・ロシアの侵入を予想した青森湾に向けて建てられ、遭難事件を日露戦争の勝利と帝国日本の発展のために必要だった犠牲として記憶し喧伝するメディアとなり、軍紀を守った壮烈な勇士を顕彰する表象となったことが論じられている。さらに四肢をほとんど切断した後藤伍長の除隊後の人生を追うために、遺族のもとに赴いて調査し、戦後、「美談に食い殺され」た「廃兵の悲劇」とされたが、結婚して夫婦仲はよく、傲ることなく、村会議員を二期務め、世話になった人を家に招いて「酒宴を開き談笑して楽しんだ」ことを明らかにしている。

第5章では、遭難死者が靖国神社に合祀されなかった経緯を子細に検討するとともに、遭難将兵が合祀されていないにもかかわらず、靖国神社に遭難事件の報告書や新田次郎の『八甲田山死の彷徨』で合祀されたと語られ続けられたという、靖国神社合祀のフォークロアが分析されている。終章では、この遭難事件の記憶は日露戦争の黒溝台会戦、また満州事変での「郷土兵」と重ね合わされて語られ、戦後では青森に駐屯する陸上自衛隊が雪中行軍を行なうようになり、郷土部隊の歴史が引き継がれていくとともに、八甲田山周辺が観光地として開発されていくなかで、この事件のテーマパークと化し、見世物化が再演されたことを指摘している。

論文審査の結果の要旨

本論文では、1902年1月、厳寒のなかで突発した、八甲田山雪中行軍遭難事件を中心テーマとし、この遭難事件による死者が「殉国の勇士」として慰霊され顕彰されて、記述され、伝承され、さらにモニュメントとして表象されて、「殉国の勇士」としての記憶が編成されていった歴史的過程を分析するとともに、歴史民俗学的な視点から、事件発生から現在までに及ぶ、この事件がたどった経過を時代相についても記述していく民俗誌を作成することを中心的課題とし、すぐれて意欲的な論文となっている。

まず第1に、この遭難事件に関する陸軍の報告書や新聞報道などの資料を対照させて用いて、事件の全貌をクリティカルな視点から分析した点をひとつの大きな成果としてあげることができる。特に陸軍の報告書に見られる、指揮官の責任を問わずに、遭難の原因を「天災」とし、また将兵が軍紀を守ったとする記述は、遭難事件を公的に伝え、記憶する原型になったことが論じられている。その一方で、遭難死者を出した地域では、遭難死の恐怖から、徴兵忌避が起こっており、動揺した民心の動向が明らかにされている。

第2に、本論文では、遭難事件を扱ったジオラマや幻灯、演劇、生人形、映画といった娯楽・見世物、写真、美談という形態の物語、モニュメント、博物館など、遭難事件を伝達し、感情を喚起し、記憶させ、一定の言説へと誘導し固定化させる、メディアを積極的に取り上げて、メディアや言説の政治性を分析し明らかにした点は評価に値する。

第3に、本論文では防衛省防衛研究所図書館や国立国会図書館の貴重な資料ばかりでなく、フィールドワークによる聞き書きによって、公的な資料には現われない遺族や地域社会の民心の動向、また美談の主人公や銅像のモデルとなった遭難からの生還者のその後が探られ、さらに雪中行軍が自衛隊で再演され、八甲田山の観光資源となっていることを明らかにして、この事件の「殉国の勇士」の物語が現在の問題として提示されている点は、民俗学の新たな領域を切り開く、すぐれた論文として大いに評価できる。

本論文では、遭難事件に関して、多角的な資料や視野から分析されているが、「殉国の勇士」としての語りや伝承、記憶においては、他の「殉国の勇士」、特に靖国神社に祀られたそれと比較して、相互の相違を検討し、遭難死者を「殉国の勇士」総体のなかに位置づけて考察することが求められる。遭難死者の幽霊譚は新聞報道や銅像、映画などのメディアを通じて、事件発生から現代にも及び、ここにこそ遭難事件の民俗誌を記述するうえで重要な課題が残されているともいえる。だが、こうした残された課題はもとより本論文の意義を損なうものではなく、今後の研究を深化させていく課題と考えられるべきものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定する。